

I 部 第24回(1974年度)学術大会報告

第I章 自由論題 第1分科会(社会科学)

1 林彪の「極‘左’思想」と「極右の本質」

菅沼 正久(長野大学)

- (1) 「一つの傾向」と「もう一つの傾向」
- (2) いわゆる「境界の画清」の問題
- (3) 「極右の本質」を批判した昔陽県

(1) 「一つの傾向」と「もう一つの傾向」

中国共産党の九全大会の以降における、中国革命の発展を特徴づけるものは、劉少奇の修正主義路線を打倒する闘争のなかで鍛練された労働兵大衆が、新たに抬頭した林彪の修正主義路線とたたかい、この闘争で新たな勝利をおさめつつあることである。林彪修正主義路線とのたたかいは、批修整風から批林批孔の大衆運動へと発展した。しかし、このたたかいはそのはじまりから、林彪集団を反革命の修正主義の政治集団として暴露してたたかわれたわけではなかった。周恩来の話によると林彪の修正主義路線に「発展の過程と暴露の過程があったし、われわれにも彼にたいする認識の過程があった」(「十全大会政治報告」)。

すでに明らかにされているように、林彪が自分で反革命の修正主義者であることを暴露したはじまりは、1969年4月の九全大会の政治報告を起草したときであった。林彪は陳伯達の協力を得て、旧修正主義のベルンシュタイン流の生産力論の立場にたって、政治報告を起草し、党中央から拒絶された。つぎに1970年9月の九期二中全会において、国家主席の制度の設置を要求し、この制度にたよって、別の党中央をつくるという、分裂の陰謀をめぐらしたが、この陰謀に失敗した。さらに、1971年3月、ひそかに「五七一工程紀要」と称するクーデター計画を立てて、9月8日を期して毛主席を暗殺し、党中央の権力をにぎることをたくらんだ。この陰謀は未然のうちに失敗し、9月13日、林彪はソ連に向けて逃亡するうちに、外蒙古のウンデルハンで墜落死した。この事件は、林彪がソ連の現代修正主義に心をよせた人物であったことを暴露した。

林彪が死亡したことによって、「林彪事件」は幕を閉じた。しかし、すでに九全大会のときからはじまった、林彪の反革命修正主義路線にたいする毛沢東の革命路線のたたかいは、9・13事件の以降、全面的に展開されるようになった。これまで「批修整風」としてすすめら

れてきた林彪路線にたいするたたかいは、「批林整風」の運動として発展した。そして、この運動をつうじて、林彪路線の本質が暴露され、「これ以上の右はないところの極右の本質」が暴露され、全党と全国人民の認識も向上した。

林彪の路線が反革命修正主義の路線であり、その本質が極右であるという認識を妨げた一つの理由は、人民大衆が劉少奇の修正主義に反対する闘争のなかで、林彪路線がしだいに抬頭したことであった。「劉少奇の修正主義に反対したときには、林彪の修正主義がおおいかくされていた。一つの傾向がもう一つの傾向をおおいかくしていて、ある潮流があらわれると多数の人がそれについて走り、ごくわずかな人だけがそれに抗するというようなこと」（前掲出、周恩来「十中全会政治報告」）が生じた。

1974年の中央三紙誌の元旦社説は、林彪路線の本質は極右であることを明らかにしたが、それ以前のしばらくのあいだは、林彪路線は極“左”であり、あるいは「形“左”実右」であるときなされていた。これが、林彪路線の本質が十分に暴露されず、党と人民が十分に認識できなかったときの状況であった。9・13事件ののち、林彪路線を暴露し批判するたたかいが、全面的にくりひろげられたが、1972年当時、「劉少奇—類騙子」とよばれた林彪の路線は極“左”として暴露され、批判された。

労働者、農民の大衆運動のなかで、「劉少奇—類騙子」のふりまいた極“左”思潮や無政府主義思想にたいする批判がくりひろげられた。例えば、工業企業管理の問題では、極“左”思潮の影響をうけた「制度无用論」が批判された。批判の方法は、「企業管理における毛主席の革命路線および政策と、劉少奇—類騙子の反マルクス・レーニン主義の路線および政策との境界を画清する」というものであった（『人民日報』1972年7月6日）。

この問題は、1967～68年に各級の革命委員会が成立し、文化大革命が「闘争、批判、改革」の段階に入ったのちにおこなわれた、劉少奇路線にたいする革命的大批判に由来した。私は1972年6月に上海市革命委員会のある機関幹部から、劉少奇と薄一波の手になる「工業管理70条」について、つぎのような話を聞いた。

「劉少奇はつくってはならない、労働者大衆を抑圧するような細かい規則制度を、無数につくった。これにたいして、騙子は社会主義として必要な、なくてはならない一切の規則制度を破ってしまった」。

この話はたいへん象徴的であると思った。そこには、二つの問題がふくまれている。第1、劉少奇批判という、当時としてはもっとも主要な「一つの傾向」にかくれて、「もう一つの傾向」、つまり林彪がプロレタリア文化大革命を破壊し、社会主義そのものを破壊するような陰謀が発展していることを、もの語っていることである。第2、劉少奇の修正主義を打倒し批判するという大衆運動のなかに生まれた「ゆきすぎ」と、この大衆運動の「ゆきすぎ」の傾向

を、革命の破壊、社会主義の破壊に利用し、発展させるところの、反革命修正主義の路線とが、混然といりまじっていることである。

(2) いわゆる「境界の画清」の問題

文化大革命の「闘争、批判、改革」の段階で、林彪はプロレタリア文化大革命そのものを破壊する陰謀をめぐらし、大衆運動のなかの「ゆきすぎ」の傾向を利用して、社会主義を破壊する路線を推進した。この陰謀は、しばしば「極“左”思潮」を利用する方法でおこなわれた。したがって、九全大会ののち、とくに九期二中全会ののちにはじまった批修整風の運動は、多くの地方では、林彪の利用した「極“左”思潮」に反対すること、「極“左”思潮」によって破壊された社会主義の制度を立てなおすことを、重要な課題としてすすめられた。しかし、社会主義の制度の立てなおしは、かつて劉少奇が「社会主義の制度」と称して、制度によって労働大衆の積極性と創造性を抑圧した経験にてらして、政治上、思想上の障害があった。

こうした事情を背景として、さきに紹介したように、「毛主席の革命路線および政策と、劉少奇一类騙子の反マルクス・レーニン主義の路線および政策とのあいだの境界を画清する」ことが問題となったわけである。この境界画清の問題について、いくつかの例をあげよう。

山西省陽泉市。1970年に九全大会と二中全会の提起した戦闘任務を立派に完成する努力によって、全市の工業生産は2カ月くりあげて、年度計画を達成した。この情勢のもとで、一部の指導幹部に自己満足の気分が生じて、一部の地方で騙子の煽動によって出現した無政府主義思潮について、階級斗争の観点で分析し批判することを怠った。そのために、労働者のあいだ組織規律性がゆるみ、企業に落後状態が生じた。

また、騙子の吹調した「政治によってその他を突出させる」論、その裏がえしの「生産がよければ政治もよいことだ」などの謬論によって、青年労働者の技術習得の意欲が低下し、生産に影響が現われた（『人民日報』1972年6月9日）。

沈阳第3建筑公司。騙子の企業管理面における極“左”思潮の影響によって、工事の質の自己検査、相互検査の制度を回復するにあたって、「制度无用論」が現われた。一部には「みんなの自覚が向上したのだから、このやり方は大衆不信となり、労働者の手足をしばることになる」という意見ははくものも現われた。また、技術無用論も現われた。（同上、1972年9月6日）。

北京第一工作機械工場。北京市では1971年下半年から、工業企業において清产核资工作をおこない、企業管理制度をうち立てる基礎をつくりだした。この工作は「闘争、批判、改革」の重要な内容をなすものであった。しかし、この工作の発展を妨げたのは、騙子のふ

りまいた極“左”思潮と無政府主義思想であった。そのため、騙子が企業管理でひろめた修正主義の「制度无用論」などを批判することが必要であった。こうして、批修整風によって清産核資工作进行を推進することができ、清産核資が批修整風の内容を豊かにする関係のものとなった（同上、1972年7月6日）。

企業管理における境界の画清。云文は企業管理の問題における無政府主義思想や、「精神が物質に代替することができる」論を批判して、企業管理の強化は「闘争、批判、改革」の重要な内容をなすことを指摘した。一部には、企業管理の強化と人民の革命の意気どみとを対立させて、管理制度に力を入れることは、労働者の手足を束縛し、積極性をくじくものだ、という意見があった。これは、騙子の吹調した「精神が物質に代替することができる」の影響をうけたものだ。また、一部には、企業管理に力を入れると、「生産第一」「利潤優先」および「管理、抑圧、圧迫」などの誤まりを犯しやすく、「危険が大きい」と考えるものがあった。しかし、企業管理には階級性があるもので、思想的には、社会主義の企業管理と資本主義、修正主義の企業管理の根本的区別をはっきりさせる必要がある。具体的には、つぎのいくつかの境界を画清しなくてはならない。

革命に力を入れて、生産を促すことを、反動的な「唯生産力論」との境界。社会主義の正当な蓄積と「利潤優先」との境界。合理的な管理制度と修正主義の「管理、抑圧、圧迫」との境界。工程技術者の役割の発揮と「専家治厂」との境界。

こうした一連の境界を画清して、プロレタリア階級の管理制度と革命的規律を実行し、無政府主義の邪風を管理し、資本主義の傾向を抑圧し、階級敵の破壊活動を圧迫する必要がある（『人民日报』1972年8月28日）。

甘肅省加龙公社。騙子の極“左”思潮の影響をうけたために「三自一包」「四大自由」などの修正主義のしるものを批判するときに、社員の正当な家庭副業と資本主義傾向とを混同した。しかし、のちに全公社で思想と政治路線の面の教育をおこない、思想面から社員の正当な家庭副業を資本主義傾向の境界を画清し、社員を激励して山に登り、土特産物を採集するようになった（『人民日报』1972年8月17日）。

遼寧省上園公社。この公社の水口大隊にぞくする4生産隊は、1969年に製粉、飼料粉碎などの加工工場を設立した。しかし、大隊幹部はこれを「小さな集団を肥やす」ものであるとみなして、大隊経営工場に吸収してしまった。その結果、生産隊の経済は貧弱なものになり、社員の積極性もくじかれた。しばらくしてのち、大隊はこのようなやり方が生産の発展に不利であることが分り、加工工場をもとの生産隊に返した。

甘肅省天水地区。一部のものは“左”は右に比べて良いことであって、“左”といわれるものは、方法の問題であって、右は方向の問題である、とみなしている。また、一部の幹

部は騙子のあおった極“左”思潮の影響をうけて、社員の家庭副業を許さないで、「私有制尻尾をひいたものだ」といていた。しかし、実際は社員が零細な時間を利用して、藁帽子編みの家庭副業をやることは、少しも集団生産に影響をあたえるものではなかった。（同上 1972 年 9 月 13 日）

広東省順徳県。文化大革命のなかで、幹部と大衆は劉少奇の「三自一包」「四大自由」「金銭挂帥」などの修正主義のしろものを批判した。しかし毛主席の革命路線と党の方針、政策についての正しい理解が欠けていたために、騙子の形“左”実右の日和見主義路線に攪乱され、政策の面から境界を画清もせず、経済作物地区の特徴を無視して、一面的に短期間に食糧の自給を追求するという現象が出現した。そのために、甘蔗、養蚕などの主な経済作物の発展が重大な影響が生じた。

県委員会の指導幹部の一部のものは、党の政策についての学習が不十分であって、“左”に傾くことはあっても、けっして右に傾かない思想にとらわれた。多角経営と「金銭挂帥」の境界が画清されず、正当な多角経営を資本主義の傾向のものとして批判した。（同上、1972 年 7 月 4 日）。

順徳県の報道について、田家平は「実際、資本主義と副業とのあいだには、いかなる必然的な連けいもない。根本的な問題は指導思想と路線問題にある」という評論をのべた。

農村経済政策の正しい実行。党の山東省昌潍地委副書記の魏堅毅は、当面の段階における党の農村経済政策の正しい実行を論じて、騙子の影響によって生じた諸問題について、つぎのように指摘した。（同上、1972 年 6 月 26 日）。

ただ「以粮为纲、全面发展」によってのみ、集団経済を強化し、農業生産を発展させることができる。また、社員家庭副業は社会主義経済の必要な補充部分をなすものである。資本主義を発展させることになるかどうかは、多角経営をやるかやらないかにあるのではなくて、決定的なのは路線と指導思想の問題である。騙子はプロレタリア階級独裁の経済の基礎を瓦解させて、資本主義を復活させるために、“左”と右の方面から攪乱をおこなって、党の路線と政策の変更をたくらんだ。

地区内のある公社では、一般的な状況はすばらしいが、「各尽所能、按劳分配」の社会主義原則が、正しく実行されていない。社員の収益分配において、平均主義がやられていて按劳付酬ができていない。男女のあいだで、同工同酬ができていない。こうした問題の生じた原因には、主として三つある。①騙子の破壊と攪乱、とくに彼らのあおり立てた極“左”思潮の影響によって、党の農村経済政策が、立派に浸透できないこと。②一部の幹部と大衆のあいだで政策の境界があいまいであって、多劳多得と「工分挂帥」の境界、男女の同工同酬と平均主義の境界、合理的な奨励と物質刺激との境界があいまいであること。③少数

の幹部が私有観念をもち、罪人となることを恐れ、誤まりを犯すことを恐れて、あえて党の原則を堅持しようとしないうこと。

当面、農村の各項目の経済政策の実行における主要なものは、“左”の傾向である。例えば、労働力の平均調達現象、分配の平均主義、非生産的支出の過大、および多角経営の発展にたいする各種の制限などである。

以上の工業企業と人民公社の事例は、文化大革命の「闘争、批判、改革」の段階において現われた騙子つまり林彪の路線と政策を、1972年の時期に、批修整風の運動が、いかに批判したたかったかをしめすものである。工業企業においては、林彪の路線を極“左”思潮、無政府主義を煽動したものとして批判している。人民公社においても、極“左”思潮の影響が主要なものとして批判されている。魏坚毅の文章は、そのことをもっともよく表現している。いかえると、林彪の路線を政策の面からつかんで批判するやり方であって、林彪路線の本質、つまり極右の本質から批判するやり方ではなかった。

林彪路線を政策の面から批判し、とくにその極“左”思潮の影響をあたえた問題として批判するやり方は不十分であった。なぜならば、このやり方では、文化大革命の革命的大批判の運動のなかで生じた真に革命的な大衆運動にむいて不可避にあらわれてくる、あの「ゆきすぎ」の傾向と、林彪の極“左”思潮を区別することは、いちじるしく困難だったからである。このやり方では、林彪を批判するという、敵味方のあいだの矛盾を処理する問題と、大衆運動の「ゆきすぎ」の傾向を是正するという、人民内部の矛盾を正しく処理する問題とを、区別することは困難であった。つまり、林彪を深く批判することは困難であった。

(3) 「極右の本質」を批判した昔阳县

1973年の中央三紙誌の元旦社説「新年献词」は、つぎのようにのべている。「新しい一年にわれわれは批修整風という、この一番の大事をひきつづきしっかりとつかみ、立派につかんでいかなければならない。批修整風をすすめるにあたっては、批修が第一で、整風はそのつぎである。各級党委は二種類のことになった性質の矛盾をきびしく区別し、つねに批判のほこ先を刘少奇一类騙子にむけ、この斗争の方向をしっかりとにぎらなくてはならない。刘少奇一类騙子の路線は反革命の修正主義路線である」。

林彪を深く徹底的に批判できるようになったのは、その路線の本質が極右であることが明らかにされ、孔子批判を林彪批判の構成部分とするようになった。1973年末もしくは1974年春以降のことにぞくすると思う。しかし、山西省大寨大隊ではやくから林彪路線の本質を極右であるとみなして、批林整風をくりひろげていた。1973年12月に陳永貴のあとをうけて、新たに党支部書記となった郭风莲は、この点についてつぎのようにのべた。

「1971 年いらい、われわれの大隊は党の基本路線をかなめとして、批林整風を深くくりひろげ、みんなで鍋底をひっくりかえす（翻锅底）やり方を用いて、大寨における二つの道の斗争、二つの路線の斗争の歴史を真剣に総括し、しっかりと実際に結びつけて、林彪が党の指導権を奪って、資本主義を復活しようとたくらんだ罪状を批判した。この批判の意気込みが高まったちょうどそのとき、社会では林彪の極“左”思潮を批判するとでもいうような、ある種のいい方が伝わっていた。大寨の党支部は陳永貴同志に引きいられて、学習したり討論したりして、林彪路線の本質は極“左”ではなくて、極右であることをはっきりさせた」（『大寨昔阳贫下中农批林批孔文选』・人民出版社1974 年5月刊）。

党の山西省委員会 は 1973 年 2 月に、同省の「农业学大寨经验交流会」を開催した。陳永貴はその席上で講演したさい、「農村で批修整風をどのように深くくりひろげるか」に論及して、つぎのように話した。昔阳県の経験にもとづいた話であるが、当然、大寨大隊の経験をも反映していると思われる。

- 1 各級の党委員会は批修整風の重大な意義を十分に認識し、「大体やればよし」（差不多）の誤まった思想を断固と克服し、「批判すべきものはない」（没批头）の誤まった認識を断固と克服して、批修整風と各種工作の関係をきちんと定めなくてはならない。そうすることによって批修整風は農村の各種工作を推進する強大な動力となる。「没批头」や「差不多」の思想はたいていのばあい、県委員会から下にひろがったものである。県委員会が批修に力を入れるか入れないかは、路線闘争に力を入れるか入れないかの重大な標識である。
- 2 批修整風において、刘少奇一类騙子の修正主義の本質をしっかりとつかんで、彼らが党の社会主義の歴史段階における基本路線と政策を勝手に改変しようとした罪状を徹底的に暴露する。広範な幹部と大衆をみちびいて、二つの路線の闘争の経験を着実に総括し、社会主義の歴史段階の主要矛盾がプロレタリア階級とブルジョア階級の闘争、社会主義の道と資本主義の道の闘争であることをはっきりさせて、たえず階級闘争、路線闘争、プロレタリア階級独裁のもとでの継続革命をたたかう決意を向上させる。…… 刘少奇一类騙子の極右の本質については、かならずはっきりさせるべきであって、彼のある種の“左”の手口にまどわされてはならない。

〔ここで陳永貴は「大衆が騙子の路線の極右の本質を認識するようになれば、幹部と大衆が実際の工作において、どれが正しく、どれが誤まりであるかをはっきり区別するようになる。改めたら決意も大きく、動作も速やかにはじまる」とのべて、72 年の秋に昔阳県であった経験を紹介した。秋収ののち、ある問題が生じ、“左”の誤まりを犯すのを恐れて、動こうとしなかった。しかし、騙子路線の極右の本質を批判することによって、

大衆は目ざめた。大衆は、「われわれはもともと右の影響をうけていたのだが、右を
“左”と考えてしまい、へたをすると学大寨運動をしくじることになった」と話していた」]

- 3 刘少奇一类骗子のばらまいた唯心論的先験論と反動的な“天才論”を力いっばいに批判し、大衆が自分の力量を認識し、幹部が大衆の力量を認識するようにする。
- 4 刘少奇一类骗子が毛主席のプロレタリア階級革命路線、社会主義制度、社会主義建設の成果、にたいして加えた侮辱と攻撃を、力いっばいに批判する。それによって広範な大衆の社会主義を建設し、社会主義を防衛する積極性と自覚を高める。また党の多快好省の社会主義建設の総路線を浸透させる。大衆の創造的精神を批修整風のなかで大いに発揚して、農業学大寨の歩みを速め、農村の三大革命運動の歩みを速める。〔1972 年春の早ばつのとき、一部の地方では早く播種することができなかった。しかし、当時、全県でくりひろげられた批修整風で、大衆の手足を束縛していた“天才論”を批判したので、灌水の大衆運動を組織して、播種を促進することができた〕。
- 5 刘少奇一类骗子の党を分裂する陰謀を力いっばいに批判して、党の幹部政策、農村における階級路線、現段階の農村の各項の経済政策、九全大会の団結と勝利の路線を浸透させる。それによって、党内と人民内部における革命的大団結をかため、千軍万馬の社会主義の大軍を組織する。こうしてはじめて、学大寨運動の評判と勢力を雄大なものにすることができきる。
- 6 批修と整風の関係に正確に対処し、敵味方と人民内部の二種類の性質のちがった矛盾を正しく処理する。昔阳の経験によると、まず第一に、大批判を刘少奇一类骗子の罪状にたいする批判、修正主義の政治路線、思想路線および組織路線にたいする批判に集中すべきである。

〔陳永貴は以上の6項をあげたのち、批修整風にさいして注意すべき5項の問題を指摘した。そのなかで、「批修は刘少奇一类骗子の極右の本質を批判することなのか、それとも彼のある種の手口でひきおこされたとまどいを批判することなのか」に注意するようにのべた〕。

陳永貴の話が明らかにしたように、昔阳県の批林整風は、さきに紹介した全国各地の工業企業や人民公社の批林整風と比べて、重要な特徴がある。第1の特徴は、批林をおこなうにあたって、林彪一味のあれやこれやの手口をとらえて批判するのではなくて、林彪路線の本質をつかんで批判したことである。第2の特徴は、林彪路線の本質が極右であることをはやくから見破って、その極右の本質を批判したことである。

1973 年の中央三紙誌の「新年献词」は、「刘少奇一类骗子の修正主義路線の本質」が社会主義の歴史段階における党の基本路線の改変、プロレタリア階級独裁の転ぶく、資

本主義の復活の反革命修正主義路線であることを暴露した。これは正しかったが、なお、「極”左”思潮」や「形”左”実右」の問題が残されていたと思う。この問題が解決されるのは、海外に向けての新聞発表でみる限りでは1974年「元旦献词」が「極右の本質」を暴露したときであった。昔阳县ではこれよりもずっと早い時期に問題を解決していた。

大寨大隊と昔阳县では、陈永贵や郭风莲の話が明らかにしているように、林彪路線を極”左”思潮とみる見方ではなく、極右とみる見方が早くからうち立てられていた。また、批林を政策や手法の面からではなくて、路線の問題としてくりひろげ、その極右の本質を批判した。このような批林整風のやり方は、全国的にはおそらく1973年末以降ではなかったかと思う。

批判を林彪路線の極右の実質にたいする批判にしぼって、まず、批林をおこなったこと、敵味方の矛盾と人民内部の矛盾を正しく区別して処理したことは、昔阳县における批林整風の重要な特徴であった。このような方法で批林整風が実行されたために、昔阳县では全国各地でみられた「境界画清」に重点をおく現象は生まれなかった。そして、批林整風が発展するにつれて、大衆と幹部の思想が解放され、社会主義建設にたいする積極性が高まり、農村における三大革命運動が推進され、農業学大寨運動が推進された。

問題は、昔阳と大寨において、こうした先進的な批林整風がおこなわれるようになった理由である。これについては、大寨の貧下中農の「反常」認識が答えていると思う（「深刻的变革」『人民日报』1974年9月19日）。